

『四畳半襖の裏張り』(1973)

1973 年 11 月 3 日公開

* 併映作品：『女子大生 偽処女』（白井伸明監督）『セミドキュメント 続・変質者』（若林孟監督）

製作…日活

配給…日活

スタッフ

監督…神代辰巳

脚本…神代辰巳

原作…永井荷風『四畳半襖の下張り』

撮影…姫田真左久

照明…直井勝正

録音…高橋三郎

美術…菊川芳江

編集…鈴木暁

助監督…鴨田好史

配役

袖子…宮下順子

伸介…江角英明

ぴん助…山谷初男

夕子…丘奈保美

花枝…絵沢萌子

花丸…芹明香

菊子…東まみ

幸一…栗津號

あらすじ

「行きつく先は 色地獄。」

神代辰巳の本作は、大正 7 年を設定としている。日本各地で米騒動が起こり、ロシア革命を受けて日本軍がシベリアへ出兵し、さらに三・一独立運動を目前に控えた激動の時代である。そうした歴史的混乱のさなか、芸者となったばかりの袖子（宮下）は、花街で初めての客である信介（江角）のもとを訪れる。信介は普段、花枝（絵沢）が相手を務めているが、花枝は新たに置屋へ入った半玉・花丸（芹明香）に指南を任されていた。花丸の訓練は過酷で、足に卵を挟んだまま置屋の床を拭かされたり、局部を使って吹き戻しを吹かされたりするなど、厳しく屈辱的な訓練が課される。一方、置屋「花の家」にいるもう一人の芸者・夕

子（丘）は、恋人である私兵の幸一（栗津）が軍事訓練へ向かう前に、涙ながらに抱き合う。

花枝から「初会の客に気をやるな」と何度も忠告されるのに、信介と過ごす夜が更けるにつれ、袖子は次第に彼への想いを深めていく。

解説

『キネマ旬報』ベスト・テンで第6位、『映画芸術』ベスト・テンで第4位、『映画評論』ベスト・テンで第1位に選ばれた『四畳半襖の裏張り』は、『映画評論』の堀英三によって、日活ロマンポルノにおける最初の傑作と評された。しかし、そのような称賛と高評価にもかかわらず、神代辰巳の本作は、映倫委員長・高橋誠一郎から「全体に面白からぬ映画」と批判され、大島渚からは洗練されすぎていると評された。さらに、ロマンポルノ最初の傑作と呼んだ堀自身も、「官憲と観客の板挟みになって」いながら、検閲制度への批判や「権力の本性」「表現の自由」「ワイセツとは何か」といった問題意識を示しつつも、最終的には「難しいことを言う気はしない」と述べている。では、このように賛否の分かれる本作の価値はどこに見出されるのだろうか。日活ロマンポルノは、類似ジャンルであるピンク映画とは異なり、性と性的表現を通じて歴史的現実へ接近することができた。社会的身体は歴史的出来事と並置され、その交錯の中から社会的・政治的・歴史的・肉体的な諸身体の弁証法的関係が立ち現れる。そして、その地点においてこそ、神代の意図が真に浮かび上がるのである。

参考資料

- ・堀英三「戯作者宣言する――神代辰巳」『映画評論』1974年1月号、39-43頁。
「『四畳半襖裏張り』大正の終末感――神代辰巳インタビュー」『映画芸術』1974年1月号。
- ・神代辰巳『映画監督 神代辰巳』国書刊行会、2019年、125頁。

（執筆：Alexander Pratt）